総評　2021.５月分　杉本真維子

　今月の佳作からいくつか紹介します。
「晴れた日は　どこか／傷ついているのか—／太陽が　それを／修復してゆく」（武中義人）岡山県
「傷ついている」と感じられることの根拠が何も書かれていないのに説得力がある。晴れた日の空というシンプルな構図から引き出される無音の抒情。

「五月闇取り次ぐだけの電話切る」（花澤希海）千葉県
電話を切ることで五月闇だけが残る。その圧倒的な闇の誕生が鮮やか。

「シャンプーのゆびさき　星の／まんなかでひかりになっている／さがしてよ」（白野）新潟県
シャンプー中の髪のなかで、小さなシャボン玉が生まれては消えている。そのように、見えにくいけれどたしかに存在するものの一人として「さがしてよ」の声は上がる。美しくも切実な世界。

「小言まだ耳に居座り大根切る」（長谷川柊香）宮城県
時が過ぎても耳に残る小言が、身体がひとつの入れ物であることを再確認させる。

「花に攫われてしまったのは／誰だったのか／淡桃の頬がチラリと覗く」（はすた）富山県
童話的な世界でありながら妙にリアル。「淡桃の頬」の生々しさが利いている。

「命がないから／あんなに／からみあう ケーブル」（翠）東京都
「命がないから」という書き方が、命があるもの同士の遠さを際立たせる。浮かび上がる人間存在のさみしさ。

「麦の穂の波で／サーフィンするツバメ／ダイブするヒバリ／一足早い里の海開き」（安楽人）佐賀県
くっきりと鮮明な「麦の穂の波」のイメージが美しい。賑やかな「里の海開き」に心躍る。

「もしかしてもう／ただわたしのために／生きているのかもしれない老犬」（春町美月）大阪府
この言葉は、想像の域を出ないものなのだろうか。素朴な一作だが、両者のあいだで言葉を超えて伝達されるたしかなものについて思いを馳せた。

　今月は力のあるかたが新たに何名か現れました。今後の活躍を楽しみにしています。